

獲得・損失状況における強制選択場面と自由選択場面間の選好

—選択肢の提示数と選択可能性の観点から—

Preference between forced-choice and free-choice under gain and loss situations:
From the viewpoint of the number of presented alternatives and the choosability○堀麻佑子¹・嶋崎恒雄²(¹関西学院大学文学研究科・²関西学院大学文学部)

Mayuko HORI and Tsuneo SHIMAZAKI

(¹Graduate School of Humanities, Kwansei Gakuin University, ²School of Humanities, Kwansei Gakuin University)

Key words: choice behavior, forced-choice and free-choice, concurrent-chains schedule

実験的行動分析の一領域として、選択場面間の選択についての検討が行われている。選択場面間の選択事態では主に、選択肢が一つしか提示されない強制選択場面と、選択肢が複数提示される自由選択場面間の選好について実証的な検討がなされており、それらの研究の多くで、自由選択場面に対する選好がみられてきた (Catania, 1975, 1980; Suzuki, 1997)。

しかしながら、なぜ自由選択場面は好まれるのか」という問題についての検討は未だ十分とはいえない。堀・嶋崎 (2010a, 2010b) は、自由選択場面を構成する「選択肢の提示数」と「選択可能性」の二つの要因に着目し、検討を行った。「選択肢の提示数」は終環で提示する刺激の数として、「選択可能性」は終環での選択の可否として定義した。結果として、自由選択場面への選好という現象は、単に選択肢としての刺激が提示されるだけでは生じず、自らが選択できる「選択可能性」が担保されることが必要であることが示唆された。しかしながら、堀・嶋崎 (2010a, 2010b) では複数の選択肢を含む選択場面間の選択事態を用いて検討を行っていたため、

なぜ自由選択場面は好まれるのか」という問題に対する解答を提出できたわけではない。そのため、本研究では、強制選択場面と自由選択場面間の選択事態において、自由選択場面に「選択可能性」が無い場合には選好がみられなくなるか否かを検討した。

従来の選択行動研究では、「選択に報酬 (ポイントや餌) が随伴する」といった報酬の獲得事態を用いて検討が行われることが多かった。堀・嶋崎 (2010) では報酬の損失事態においても、強制選択場面と自由選択場面間の選好の検討を行っており、自由選択場面への選好がみられることを報告している。しかし、報酬の損失事態における自由選択場面への選好の過程についても獲得事態と同一であるとは限らない (e.g., Kahneman & Tversky, 1979)。そのため、本研究ではポイントの獲得と損失の二つの事態を用いて検討を行った。

方法

【実験参加者】 大学生 36 名 (男性 14 名、女性 22 名)。平均年齢は 20.2 歳 (8 歳から 23 歳)。実験参加者は無作為に実験 1 と実験 2 に割り当てた。

【実験課題】 課題は並立連鎖スケジュールによって制御した。ディスプレイ上に提示した色つきカードを選択肢として設定した。実験 1 ではポイントの獲得事態を、実験 2 ではポイントの損失事態を設定した。

初環において、実験参加者に 2 つの選択場面間の選択を求めた。場面選択ボタンに 1 回反応した後、終環に移行した。終環では、初環の選択に応じて 1 枚、もしくは 2 枚のカードを提示した。提示するカードは、色によって獲得する、あるいは損失するポイントが弁別可能であった。また、堀・嶋崎 (2010) と同様に、Irrational 条

件、Equal 条件、Rational 条件の 3 条件を設定した (Table 1)。自由選択場面では、実験参加者はカードを選択することが出来ず、コンピューターが自動的にカードを選択した。このとき、獲得するポイントが相対的に多い、あるいは損失するポイントが相対的に少ないカードを必ず選択した。その後、獲得する、あるいは損失するポイントを提示した。ポイントは、両実験において 40% の確率で提示した。

【手続き】 実験参加者には、課題開始前に、なるべく多くのポイントを稼ぐこと、あるいは手元に残すことを教示した。その際には、課題終了後に 5 ポイントを 1 円で換金することを教示した。実験 2 では、初めに 1000 ポイントを与えた。初環からポイント提示までを 1 試行とし、1 条件ごとに 40 試行を行い、3 条件が終了した時点で課題が終了した。条件の施行順序は実験参加者間で平衡した。

結果および考察

Figure 1 には、各実験における自由選択場面の初環の平均選択率を示している。左列には実験 1 の結果を、右列には実験 2 の結果を示している。両実験において、Irrational 条件と Equal 条件では選好はみられず、Rational 条件においてのみ自由選択場面に対する選好がみられた。Rational 条件の結果は、ポイントの期待値に従った選好がみられたことを示唆している。また、実験 1 と実験 2 の対応する条件間で選好の程度に差はみられなかった。Irrational 条件と Equal 条件の結果から、自由選択場面において「選択可能性」が無い場合には、自由選択場面への選好は生じないことが示された。この事実は、なぜ自由選択場面は好まれるのか」という問題に対する一つの解答となると考えられる。

Table 1

		Experimental Design (Exp.1, Exp.2)		
		Terminal Link		
	Condition	Forced-choice	Free-choice	
Gain	Irrational	G (10)	G (10)	B (5)
	Equal	G (10)	G (10)	G (10)
	Rational	G (10)	G (10)	R (15)
Loss	Irrational	G (10)	G (-10)	R (-15)
	Equal	G (10)	G (-10)	G (-10)
	Rational	G (10)	G (-10)	B (-5)

Note. The details of three conditions. Letters represent color of cards. G, B, and R indicate green, blue, and red card respectively. Numerals represent point of value of cards.

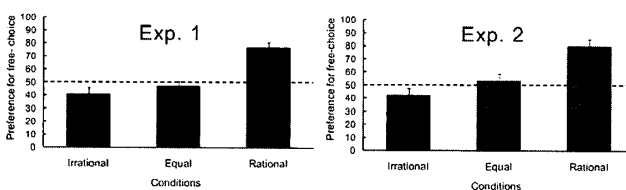


Figure 1. Preference for free-choice in the three conditions for the two experimental groups. The broken line represents a chance level. Error bars represent the standard error of mean.